

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「阪急キッチンエール、都内で 10 月から開始」
- 2) 「オークワ、テレビでネットスーパー」
- 3) 「コカ・コーラ、ベース&フレーバーを選べるディスペンサー」
- 4) 「電力不足で“ごみ発電” 脚光」

1) 「阪急キッチンエール、都内で 10 月から開始」

エイチ・ツー・オーリテイリングは 8 月 4 日、東京都内で食品宅配サービス「阪急キッチンエール」を 10 月 23 日から開始すると発表した。

対象エリアは、世田谷区をなど 11 区でサービス開始し、東京都、神奈川県とエリアを拡大する計画で、初年度の売り上げ目標は 3 億円、最終目標として 200 億円を掲げている。

「買物に行く時間がない、小さな子供がいる家庭、重い荷物（水、酒など）、かさばる荷物（トイレットペーパーなど）を届けてほしい、デパ地下の食品が好き」といったニーズに対応する。

野菜、果物、加工食品といった食料品をはじめ、デパ地下で人気の銘菓名品・話題のスイーツ・お惣菜や日用雑貨まで、パソコン、携帯電話などから、24 時間注文を受け付け、前日の深夜 12 時までの注文で、翌日の夕方 5 時頃までに届けるサービス。商品特性に合わせた冷凍、冷蔵、常温の 3 つの温度帯の箱で届ける。

3000 円以上の購入で送料無料、入会金 1050 円、月会費 500 円で、妊娠中・3 歳未満の乳幼児がいる家庭、70 歳以上の型は月会費が半額となっている。なお、9 月末までの入会者は、入会金無料、半年間月会費無料。

身近なネットスーパーとはまた違った、デパ地下商品が買えることが一つの強みなのかもしれない。ホームパーティの際やハレの日など、都内ではより需要がありそうだ。

2) 「オークワ、テレビでネットスーパー」

オークワは 7 月 30 日から、「ネットスーパーオークワ」各店で「テレビ de ネットスーパー」事業を開始した。

「テレビ de ネットスーパー」は、これまでパソコンや携帯電話で利用していたネットスーパーをテレビに専用機器（ブラウザ BOX）を取り付けることで、リモコンの操作で利用できるようにしたもの。

パソコンを持っていない人やパソコン操作が苦手な人でも、家庭のテレビで簡単に利用できる便利なシステムという。

西日本電信電話（NTT 西日本）との協業企画として、NTT 西日本が提供する光ブロードバンドサービス「フレッツ光」回線を新規お申込みすると、専用機器と訪問設定費が無料で「テレビ de ネットスーパー」を利用できるようになる。

地デジ化移行が済んだ中、このサービスに対応している TV を持っている人は多い。その中でパソコンやインターネットに抵抗をもっている人もリモコンで簡単操作出来るなら気軽に初めてくれそうで、新しい顧客の開拓も狙えそうだ。

利用可能店舗をどんどん拡大するそうなので、これからの動きにも注目したい。

3) 「コカ・コーラ、ベース&フレーバーを選べるディスプレイ」

日本コカ・コーラは2日、最大112種類のドリンクを提供する次世代型ファウンテンディスプレイ「コカ・コーラ フリースタイル」を羽田空港内に設置し、稼動開始した。場所は、同空港内のレストラン「エアポート・ダイナー」。

同マシンは、濃縮されたシロップの原液をその場で飲料水や炭酸水で希釈して販売するタイプ。「コカ・コーラ」「アクエリアス」「ファンタ」「Sprite」など14種類のベースドリンクと、「レモン」「ピーチ」「フルーツパンチ」「バニラ」など10種類のフレーバーを用意し、各ベースドリンクに最大8種類のフレーバーを組み合わせ、好みのドリンクをつくることことができる。組み合わせにより、最大112種類（既存機の約20倍相当）のドリンクが提供可能という。

また、ベースドリンクには日本未発売となる「DASANI」「DASANI スパークリング」「Hi-C ゼロ」「ファンタ ゼロ」「Sprite ゼロ」が含まれているのも特徴。

操作方法は、抽出口の下に紙コップをセットし、氷レバーを押して氷を入れた後、タッチスクリーンで好みのベースドリンクとフレーバーを選択するだけ。価格は飲み放題で250円。同社によると、同機は2009-10年に米国市場においてテスト導入され、米国内では現在1500台以上が設置されているという。日本へ導入されるのは今回が初めて。今後は、飲食店や映画館などを中心に年内に10-30台の設置を目指すとしている。

飲料業界では期間限定でオリジナルフレーバーが販売されることはあるが、「自分好み」の味が試せるのは消費者の興味をひくだろう。これに限らず、「カスタマイズ」に対応するのはたとえ手間がかかったとしても、ブランド力のさらなる強化につながるのではないか。

4) 「電力不足で“ごみ発電”脚光」

電力不足が懸念される中、「ごみ発電」が注目を集め始めている。一般的な「ごみ発電」は、ごみを焼却する際に発生する高温燃焼ガスによりボイラで蒸気を作り、蒸気タービンで発電機を回すことによって発電する。「発電に伴う二酸化炭素」は発生しないため、環境にやさしいというわけだ。また、定期的にごみを焼却することから供給が安定していることや、発電規模は小さいが電力需要に直結した分散型電源であるなどのメリットがある。

そこで、東京都などはごみ焼却熱による発電を、電力の需要がピークを迎える夏に増やす計画を立てている。東京23区の清掃工場では、20カ所で発電を行っており、発電能力は最

大約 25 万キロワットと中規模の火力発電所に匹敵する。ただ、実際の発電量はこの半分程度で、工場でも自家消費するため、東京電力への売電量はさらに少なくなる。そこで、夏場に予定されていた補修工事をずらして休止炉を減らすほか、工場内での消費を減らす工夫をしたり、焼却炉へのごみ投入量を昼間に集中させ発電量を増やすなどして売電量を増やしている。これによって、約 3 万世帯分の電力が賄えるという。

こうした技術やノウハウは、海外でも評価されつつある。特に海外では、都市ごみが埋め立てられることが多く、焼却炉の需要はあまりなかった。しかし、都市ごみの増加が問題になり始め、さらに、ごみ焼却時の廃熱が新たなエネルギー源として注目されるようになったことで、発電能力を備えたごみ焼却炉の需要が拡大している。

そこで、「ごみ発電」分野のインフラ輸出も始まっている。海外で焼却炉を中心とする環境プラント事業に力を入れている日立造船は、イギリスのごみ焼却発電事業者から、イギリス北東部の都市ごみ焼却発電プラント建設工事を受注したと発表した。事業規模は 200 億円と推定されている。プラントは処理能力が日量 456 トンの焼却炉 2 基と、出力 2 万 4000 キロワットの発電設備で構成される。

「ごみ発電」の技術は、JFE エンジニアリングや三菱重工業など他の焼却炉メーカーが有しており、海外展開を狙っている。原子力発電所の事故で、原子力分野のインフラ輸出が暗礁に乗り上げている日本にとって、「ごみ発電」のノウハウは 1 つの財産となりそうだ。

ゴミを燃やしていろいろなエネルギーに再活用するという話は聞いたことがあるが、実際に 3 万世帯分の電力が賄えるほど発電能力があるとは知らなかった。

様々な難関があると思うが、こうした取り組みが日本中に広がればゴミ問題も電力問題も解決に近づくのではないかと。また、日本の技術を世界に発信する良い機会でもあると思う。